| 群教セ | G01 － 02 |
|---|---|
| | 平22.242集 |

# 小学校国語科「伝統的な言語文化」の指導にかかわる調査研究
## ── 伝統的な言語文化に親しむ態度の育成に向けて ──

長期研修員　　内藤　麗子

《研究の概要》
学習指導要領改訂に伴い、小学校国語科において「伝統的な言語文化」が新たな指導事項として加わり、各学年において継続的に指導し古典に親しめるように配慮すること、各領域の活動を通した指導を基本とすることが示されている。本調査研究では指導にかかわる教師と児童の意識について調査を行い、現状と課題を明らかにし、伝統的な言語文化に親しむ態度の育成に向けての提言を行った。
**キーワード**【国語－小　調査研究　伝統的な言語文化　古典　親しむ】

## Ⅰ　研究の背景と目的

### １　現状と課題

小学校新学習指導要領の国語（平成20年３月告示）では、現行学習指導要領の言語事項に代わり、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設された。伝統的な言語文化に関しては、現行学習指導要領では高学年の言語事項として、「易しい文語調の文章を読んで，文語の調子に親しむこと」と示されていたのみであったが、新学習指導要領では、「各学年で行い，古典に親しめるように配慮すること」とされている。教材として、低学年は「昔話や神話・伝承」、中学年は「易しい文語調の短歌や俳句、ことわざや慣用句、故事成語」、高学年は「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章、古典について解説した文章」が挙げられており、これまでほとんどの児童が触れてこなかった神話や中学校で扱っていた古文や漢文を取り上げることとなる。また、小学校学習指導要領解説国語編では、「『Ａ話すこと・聞くこと』，『Ｂ書くこと』及び『Ｃ読むこと』の各領域の指導を通して行うことを基本とする」と示されており、各領域で目指す言語能力を育成する中で、伝統的な言語文化に親しませることが求められている。

伝統的な言語文化のように新たな指導事項については、指導に関する情報が必要となる。しかし、様々な文献には、児童の親しむ具体的な姿や程度について見解の相違が見られる。学習指導要領にも明確に示されてはいない。このような状況では、教師の指導経験や価値観が指導内容や方法に大きく影響することが予想されるため、その現状を明らかにしていくことが必要である。また、伝統的な言語文化に関する児童の経験や知識、文語に対する抵抗感の有無などを把握しておくことが適切な指導につながると考える。しかし、伝統的な言語文化に関する小学生のデータは、ほとんど見られない。よって、児童の意識についても明らかにしていくことが必要である。

### ２　研究の目的

小学校国語科「伝統的な言語文化」について教師と児童の意識調査を行い、伝統的な言語文化に親しむ態度の育成に向け、指導に当たっての留意点を提言する。

## Ⅱ　仮説

伝統的な言語文化にかかわる教師と児童の意識を調査することにより、それぞれの現状、及び日常の国語科の指導と伝統的な言語文化に親しませる指導とのかかわりをとらえることができ、それらを基に、指導に当たっての留意点が明らかになるだろう。

## Ⅲ　調査対象

群馬県内公立小学校に在籍する教師と児童を対象とする。教師については、学級担任から 416名を抽出する。児童については、低学年、中学年、高学年より各１学年ずつ新たに学習に取り組む下学年を対象とすることを原則とし、中学年は第３学年 434名、高学年は第５学年 441名を抽出する。低学年については、下学年の第１学年は小学校での学習経験が浅いため、調査を実施する場合には児童、教師の双方にとって負担となることが予想される。よって、上学年の第２学年を対象とし、442名を抽出する。

調査用紙回収後、回答に不備のあるものを削除した結果、有効回答数は、教師 390名、第２学年 432名、第３学年 420名、第５学年 424名となった。

## Ⅳ　調査内容

### １　調査の基本的な考え方

小学校学習指導要領解説国語編では、「伝統的な言語文化に低学年から触れ，生涯にわたって親しむ態度の育成を重視している」と示されている。「親しむ」とは、「好んで継続的に接する。また、なじむ」ことである（大辞林より）。したがって、伝統的な言語文化に親しむとは、「伝統的な言語文化に興味や関心をもち、そのよさを認め、かかわり続けること」であると考える。

伝統的な言語文化についての学習が全ての学年において設定されたことは、大変意義深いことである。しかし、児童の実態に即した適切な指導が展開されていかなければ、小学校の段階から伝統的な言語文化を敬遠してしまうことになりかねない。そこで、教師と児童に対して意識調査を行い、その結果を比較・分析し、伝統的な言語文化に親しむ態度の育成に向け、指導にあたっての留意点を提言する。

### ２　具体的な内容

教師と児童の双方を対象とした調査項目として、「伝統的な言語文化の学習について」「伝統的な言語文化の学習とかかわりの深い言語活動等について」を設定した。さらに、教師については、「指導に対する考え」として、指導の成果として期待することや疑問や不安などについて尋ねる項目を設定した。

各項目の質問内容は、次の通りである（図１）。

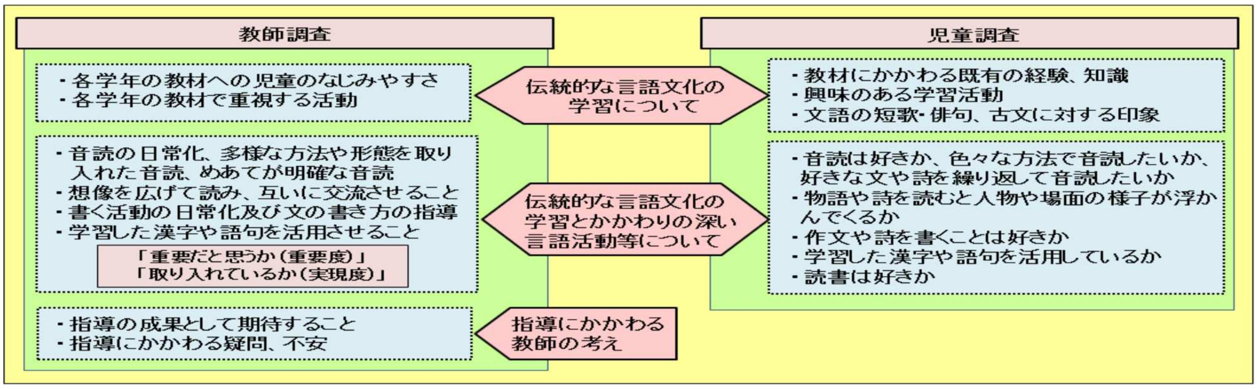


図１　調査項目と質問内容

## Ⅴ　調査の実施

### １　調査票

教師、児童共に質問紙による調査とし、４段階評定尺度法、複数選択法、自由記述法を取り入れる。また、教師、第３学年、第５学年については、SQSによるマーク方式で実施する。

## 2　データ処理の方針と分析

単純集計で全体の傾向を把握後、教師調査では「教職経験年数、及び国語科免許所有の有無と指導に対する意識」、児童調査では「伝統的な言語文化にかかわる教材に対する意識、及び経験や知識と学習に対する意識」に関してクロス集計し、「$\chi^2$（カイ二乗）検定」により有意差の有無を明らかにする。

# Ⅵ　研究の結果

## 1　伝統的な言語文化の学習について

### (1)　児童の読書経験や知識

図２は、２年児童に昔話や神話の作品を読んだり聞いたりしたことがあるかを尋ねた結果である。昔話については「桃太郎」が84%、「花さかじいさん」が80%、「さるかに合戦」が77%であるのに対し、神話については「いなばの白うさぎ」が24%、「海彦山彦」が13%である。昔話に比べて、神話を読んだり聞いたりしたことがある児童は非常に少ない。

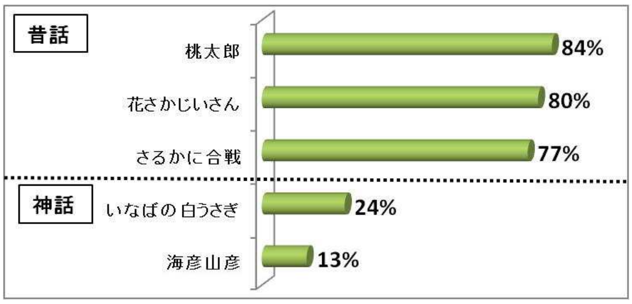


図２　児童が読んだり聞いたりしたことがある昔話や神話（２年）

３年児童の調査では、「知っている短歌・俳句」を挙げさせた。正しく記入した児童は９%、短歌・俳句の一部分のみを記入した児童が４%、五・七・五の標語を記入した児童が２%、何も記入しなかった児童が85%であった。

図３は、５年児童に古文や文語調の文章の作品を読んだことがあるかを尋ねた結果である。「雨ニモ負ケズ」（53%）は、およそ半数の児童が読んでいる。「枕草子」「平家物語」「坊っちゃん」「蜘蛛の糸」は、読んだり聞いたりしたことがある児童が３割に満たない。なお、「どの作品も読んだことがない」という児童は33%であった。

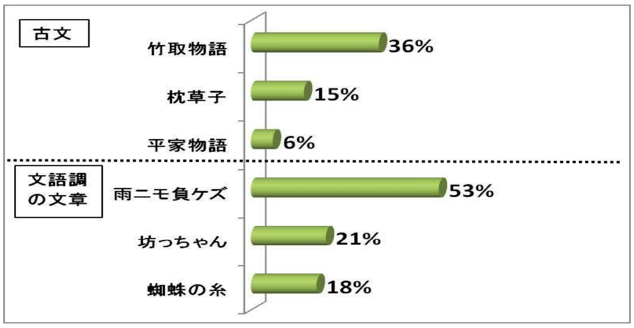


図３　児童が読んだことがある古文や文語調の作品（５年）

図４は、各学年の教材に対する興味・関心として、いろいろな作品を読んでみたいと思うかを尋ねた結果である。昔話については、「思う、少し思う」（以下、「思う」）が81%である。それに対して、短歌・俳句（68%）、文語の文章（64%）については、数値が低くなっている。

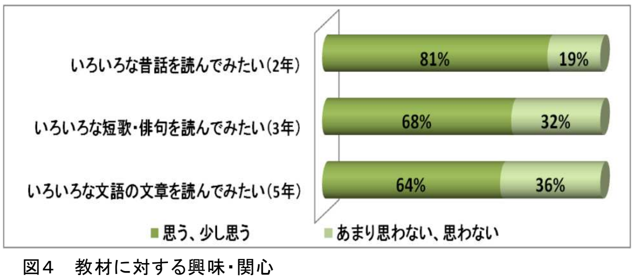


図４　教材に対する興味・関心

### (2)　伝統的な言語文化にかかわる経験や知識と、作品を読むことに対する意識

各学年の教材に触れた経験と、作品を読むことに対する意識についてクロス集計を行った。$\chi^2$検定の結果、全ての学年で、経験が多くある児童は、少ない児童に比べて、いろいろな作品を読んでみたいと回答する割合が有意に多いことが分かった（図５～図７）。

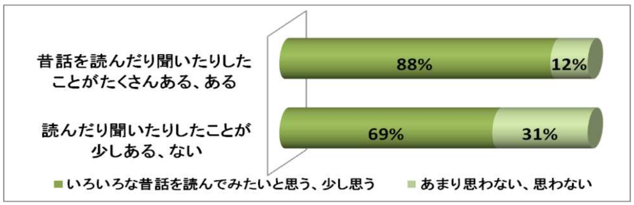


図５　昔話に触れた経験と、作品を読むことに対する意識（２年）

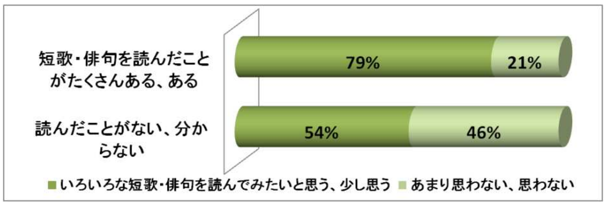

図６　短歌・俳句に触れた経験と、読むことへの興味・関心（３年）

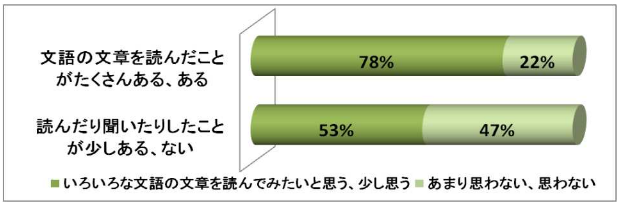

図７　文語の文章に触れた経験と、読むことへの興味・関心（５年）

### (3)　文語に対する児童の意識

３年生と５年生に文語は自分たちが使っている言葉と違うと思うかを尋ねた結果、３年生は91%、５年生は93%が「思う」と回答した。また、文語は読みやすいと思うかを尋ねた結果、３年生は55%、５年生は79%が「あまり思わない、思わない」（以下、「思わない」）と回答した。また、５年児童の調査では、「文語で書かれた文章を読んでみたいですか」の問いに対して、回答と共に、その理由についても記述させた。「読んでみたいと思わない」と回答した児童の多くは、「読みづらそう」「意味が分からない」ことを理由として挙げている。一方、「読んでみたい」と回答した児童の理由としては、「自分たちが使っている言葉と違っているところがおもしろい」という記述が多く見られた。

### (4)　学習活動に対する教師と児童の意識

図８は、昔話の学習で教師が重視する活動と、２年児童が取り組みたい活動を示したものである。教師が重視している活動は、「音読」が最も多く（73%）、次いで「読み聞かせ、語り」（61%）、「心情や場面の様子の読み取り」（47%）となっている。児童が取り組みたい活動は、「読み聞かせ、語り」が最も多く（65%）、次いで「劇化、紙芝居づくり」（60%）、「音読」（43%）となっている。教師の数値が児童の数値を大きく上回っている活動は、「音読」（差30ポイント）「心情や場面の様子の読み取り」（差22ポイント）である。それに対し、児童の数値が教師の数値を大きく上回っている活動は、「劇化、紙芝居づくり」（差30ポイント）「お話づくり」（差26ポイント）となっている。

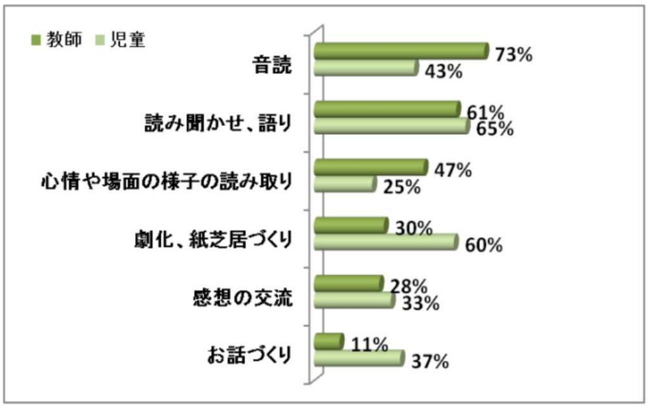

図８　教師が重視する活動と児童が取り組みたい活動（２年）

図９は、短歌・俳句の学習で教師が重視する活動と、３年児童が取り組みたい活動を示したものである。教師が重視している活動は、「音読」が最も多く（65%）、次いで「暗唱」（56%）、「心情や情景を思いうかべる」（53%）となっている。「分からない語句の意味調べ」（16%）は、他の項目より非常に低い数値である。児童が取り組みたい活動は、「分からない語句の意味調べ」が最も多く（65%）、次いで「音読」（52%）、「短歌づくり、俳句づくり」（42%）となっている。教師の数値が児童の数値を大きく上回っている活動は、「暗唱」（差21ポイント）である。児童の数値が教師の数値を大きく上回っている活動は、「分からない語句の意味調べ」（差49ポイント）となっている。

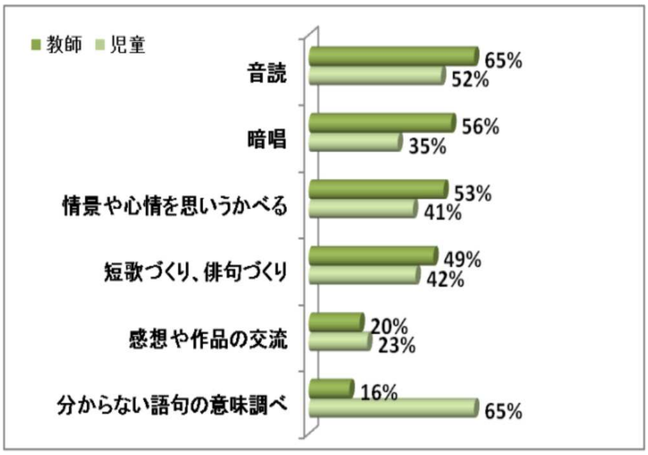

図９　教師が重視する活動と児童が取り組みたい活動（３年）

図10は、古文の学習で教師が重視する活動と、５年児童が取り組みたい活動を示したものである。教師が重視している活動は「音読」が最も多く（73％）、次いで「昔の人のものの見方を知る」（49％）、「暗唱」（37％）となっている。「作品を参考にして文章を書く」（５％）、「朗読劇」（６％）は他の項目に比べ、低い数値である。児童が取り組みたい活動は、「分からない語句の意味調べ」が最も多く（56％）、次いで「朗読劇」（53％）、「音読」（47％）となっている。教師の数値が児童の数値を大きく上回っている活動は、「音読」（差26ポイント）「昔の人の生活、ものの見方を知る」（差33ポイント）である。児童の数値が児童の数値を大きく上回っている活動は、「朗読劇」（差47ポイント）「分からない語句の意味調べ」（差23ポイント）となっている。

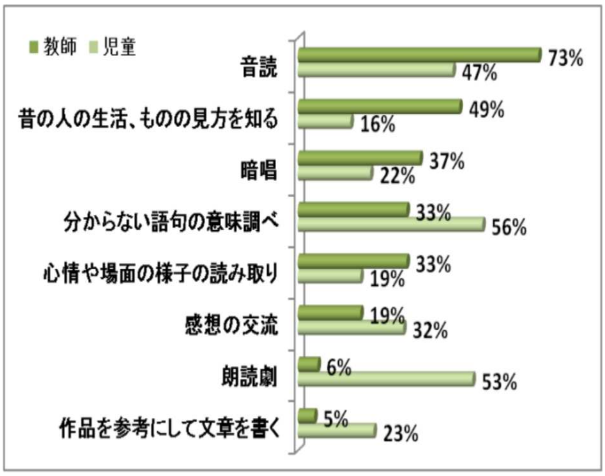

図10　教師が重視する活動と児童が取り組みたい活動（５年）

### (5)　文語で書かれた内容を理解することと、学習に対する興味・関心

図11と図12は文語で書かれた内容を理解することと、学習に対する興味・関心についてクロス集計を行ったものである。３年生で「内容が分かる、少し分かる」（以下、「分かる」）と答えた児童のうち、いろいろな短歌・俳句を読んでみたいと思う児童は82％、「あまり分からない、分からない」（以下、「分からない」）と答えた児童のうち、読んでみたいと思う児童は60％で、$\chi^2$検定の結果、有意差が認められた。また、５年生で内容が分かると答えた児童のうち、いろいろな文語の文章を読んでみたいと思う児童は75％、分からないと答えた児童のうち、読んでみたいと思う児童は49％であり、$\chi^2$検定の結果、有意差が認められた。

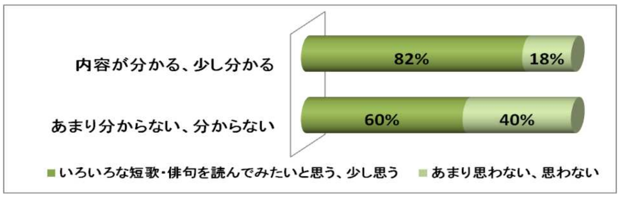

図11　短歌・俳句の内容理解と、読むことへの興味・関心（３年）

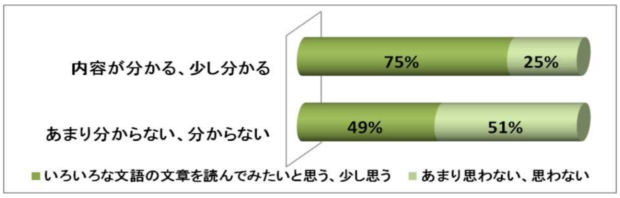

図12　文語の文章の内容理解と、読むことへの興味・関心（５年）

## 2　伝統的な言語文化の学習とかかわりが深い言語活動等について

### (1)　教師の意識

図13は、伝統的な言語文化の学習とかかわりが深い言語活動について、「重要だと思うか（重要度）」「取り入れているか（実現度）」を４段階で回答した結果の平均値である。

重要度は、「日常的に音読する」（3.9）が最も高く、次いで「書く活動を日常化する」「学習した漢字や語句を活用する」（共に3.8）となっている。「多様な方法や形態で音読する」（3.4）は、他の項目に比べて数値が低い。

実現度は、「日常的に音読する」（3.8）が最も高い。「物語や詩を読んで想像したことを交流する」「文の書き方を指導する」（共に2.9）は、最も低くなっている。「文の書き方を指導する」は、重要度と実現度の差が最も大きくなっている。

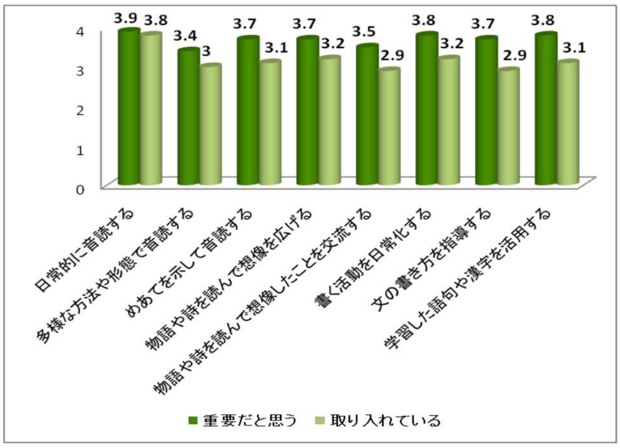

図13　伝統的な言語文化とかかわりの深い言語活動に対する意識（教師）

## (2) 児童の意識

図14は、伝統的な言語文化とかかわりの深い言語活動に対する２年生の意識調査に関する結果である。「あてはまる、少しあてはまる」(以下、「あてはまる」) の数値が高い項目は、「登場人物になりきって音読することは楽しい」(78%)、「音読することが好き」(77%) となっている。「あてはまる」の数値が低い項目は、「文を書くことが好き」(31%) である。

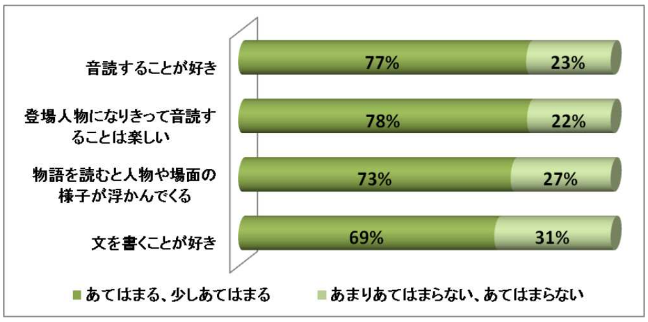


図14　伝統的な言語文化とかかわりが深い言語活動に対する意識（2年）

図15は、３年児童の結果である。「あてはまる」の数値が高い項目は、「学習した語句や漢字を活用している」(81%)、「物語や詩を読んでいると様子が浮かんでくる」(75%) となっている。「あてはまる」の数値が低い項目は、「好きな文や詩を繰り返して音読したいと思う」(58%)、「作文や詩を書くことが好き」(60%) である。また、「音読することが好き」(68%) は、「あてはまる」が２年児童に比べて10ポイント下回っている。

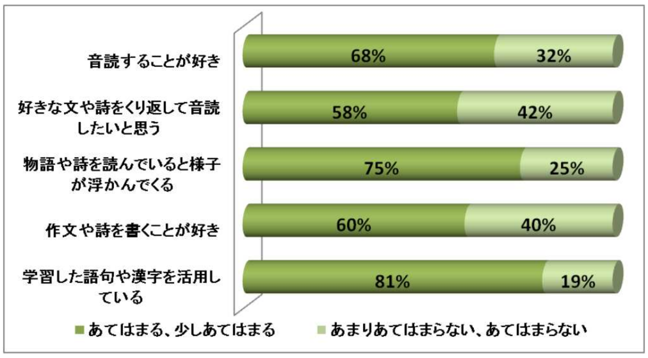


図15　伝統的な言語文化とかかわりが深い言語活動に対する意識（3年）

図16は、５年児童の結果である。「あてはまる」の数値が高い項目は、「学習した語句や漢字を活用している」(84%)、「物語や詩を読んでいると様子が浮かんでくる」(81%) である。「あてはまる」の数値が低い項目は、「音読することが好き」(57%)、「好きな文や詩をくり返して音読したいと思う」(55%)、「作文や詩を書くことが好き」(46%) である。また、２年生、３年生と比べると、「音読が好き」「文を書くことが好き」の数値が最も低くなっている。

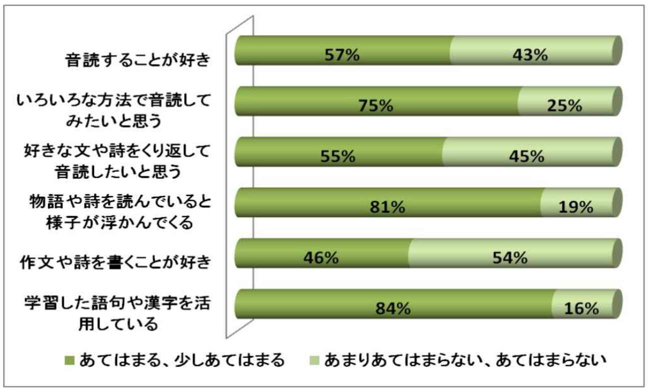


図16　伝統的な言語文化とかかわりが深い言語活動に対する意識（5年）

## (3) 読書に対する意識と伝統的な言語文化に対する意識

図17～図19は、読書に対する意識と伝統的な言語文化にかかわる作品を読むことに対する意識のクロス集計を行った結果である。「読書が好き、少し好き」(以下、「好き」) と回答した児童は、２年生が89%、３年生が87%、５年生が79%であった。また、$\chi^2$検定の結果、読書が「好き」と回答した児童は、「あまり好きではない、好きではない」(以下、「好きではない」) と回答した児童に比べ、「いろいろな作品を読んでみたい」と回答する割合が有意に多く見られた。

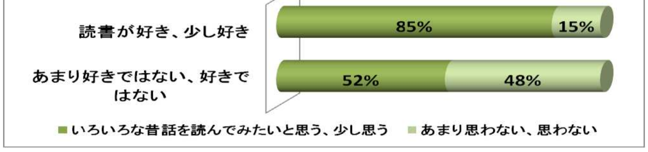


図17 読書に対する興味・関心と昔話への興味・関心（2年）

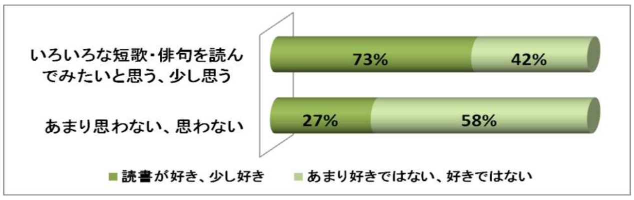


図18 読書に対する興味・関心と短歌・俳句に対する興味・関心（3年）

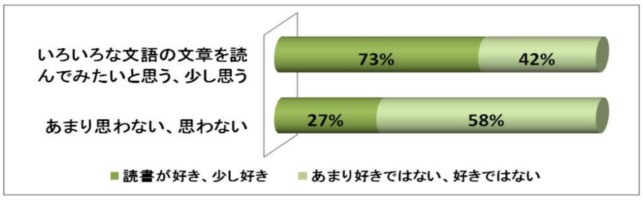


図19 読書に対する興味・関心と文語の文章への興味・関心（5年）

### 3　伝統的な言語文化の指導にかかわる教師の考え

#### (1)　指導の成果として期待すること

図20は、伝統的な言語文化にかかわる指導の成果として期待することについて尋ねた結果である。「昔話の言い回しや文語のリズムに慣れる」「小学校で学んだ経験が中学校で生かされる」は、数値が高くなっている。「文語で書かれた文章の内容を読み取る」は、全ての項目の中で最も低い数値である。

また、国語科免許所有の有無とクロス集計し、$\chi^2$検定を行った結果、「文語の文章に対する抵抗感が軽減される」「創作に関心をもつようになる」については、免許所有者が「思う」と回答した割合が有意に多いことが分かった。

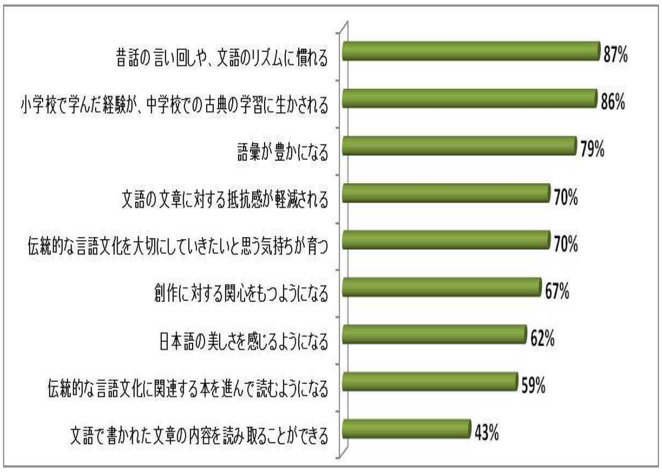

図20　指導の成果として期待すること

#### (2)　指導にかかわる疑問、不安

図21は、伝統的な言語文化の指導にかかわる疑問や不安について尋ねた結果である。全10項目のうち、８項目が80％を超えている。最も数値が高い項目は、「小学生にどのレベルまで指導したらよいか」（88％）である。最も数値が低い項目は、「児童はどの程度の経験や知識をもっているのか」（61％）である。この項目は、他の項目に比べて非常に低い数値となっている。

教職経験年数とクロス集計し、$\chi^2$検定を行った結果、全ての項目において有意差は見られなかった。国語科免許所有の有無とのクロス集計では、「児童はどの程度の経験や知識をもっているのか」「評価はどのようにしたらよいか」を除く全ての項目において、国語科免許を所有していない教師は、所有している教師に比べ、「思う」と回答した割合が有意に多いことが分かった。

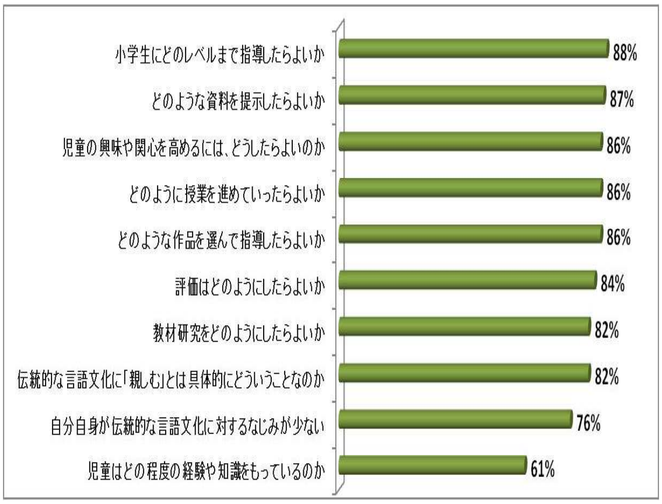

図21　指導にかかわる疑問・不安

## Ⅶ　研究の考察

### 1　伝統的な言語文化の学習について

#### (1)　児童の読書経験や知識と学習に対する意識

本調査から、多くの児童が「昔話」に触れた経験があるのに対し、「文語調の短歌・俳句」「文語調の文章」については、読書経験や知識をもつ児童が非常に少ないことが分かった。また、「いろいろな作品を読んでみたいですか」の問いに対して、「昔話」に比べると「文語調の短歌・俳句」「文語調の文章」は、肯定的な回答がかなり少なくなっている。このように、伝統的な言語文化の学習で扱う教材には、児童の経験や知識に差があり、その差が教材に対する興味・関心と関連している。このことを踏まえ、児童の経験や知識が少ない教材を指導する際には、分かりやすく楽しい内容の作品を選ぶことが大切である。特に、導入では、読み聞かせを取り入れる、作品や作者に関するクイズを出題する、実物や写真など視覚に訴える資料を提示するなどの方法で、「楽しそうだな、読んでみたいな」という興味を喚起することが必要である。

### (2)　文語に対する児童の意識

文語については、「現代語との隔たりを感じる」「読みづらい」「書いてある内容が分からない」といった理由から、抵抗感をもつ児童が多く見られる。したがって、現代語訳を併用しながら抵抗感を軽減し、児童が作品の面白さに触れることができるように留意したい。また、児童にとって身近な言葉の中から、昔は異なる意味で使われていたものを取り上げることも文語に対する興味を高めていくために有効であると考える（図22）。

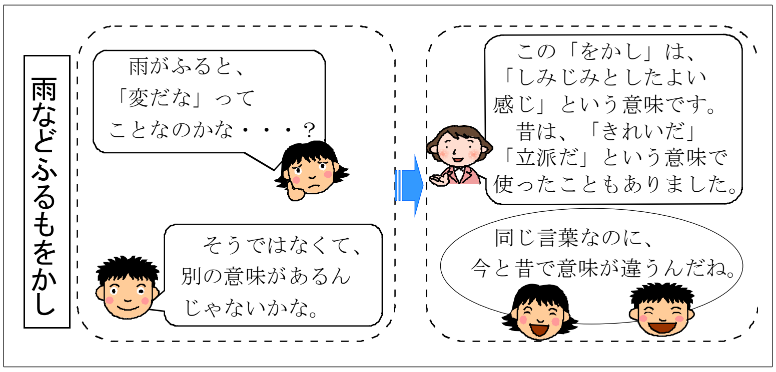


図22　今と昔の言葉の違いに着目する学習の例

### (3)　学習活動に対する教師と児童の意識

本調査では、学習活動に対する教師と児童の意識の違いも明らかになった。教師は、各学年及び各教材において、全て「音読」を重視している。しかし、児童調査では、「音読」が取り組みたい活動として位置付いているとは言えない結果となっている。「音読」は、昔話の言い回しや文語のリズムの特徴を感じ取らせるための大切な手だてであるが、児童の意識に目を向け、指導方法を工夫していかなければ親しむ態度の育成を阻害してしまうこともあり得る。児童は「劇化」「朗読劇」といった表現を工夫しながら音読することには、強い興味を示している。したがって、低学年の場合は表情や動作をまねながら登場人物に同化させる、高学年の場合はグループで分担を決め、効果的な読み方を工夫させるなど、発達段階や興味に応じた方法を取り入れることが必要である。

また、児童は、教師が考える以上に文語で書かれた作品の内容を理解することに関心をもっている。教師にとっては、古典は難しいという意識をもたせてしまうのではないかと懸念し、意味に関する指導を躊躇することもあるかもしれない。しかし、本調査では、内容が分からない児童は、作品を読むことへの興味・関心が低いことが明らかになっている。よって、児童の負担にならぬように留意しながら内容の理解に必要なことについて取り上げることは、親しむ態度の育成につながると考える（図23）。

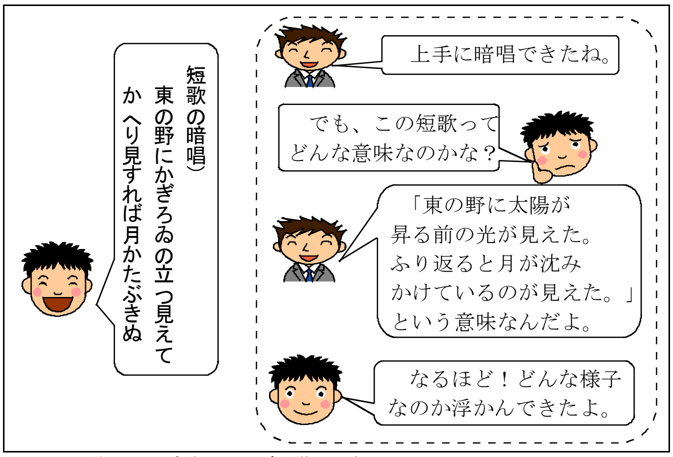


図23　作品の内容を取り上げる学習の例

## 2　伝統的な言語文化の学習とかかわりが深い言語活動等について

伝統的な言語文化に親しませていくためには、「話すこと・聞くこと」「書くこと」及び「読むこと」の各領域において、伝統的な言語文化の学習とかかわりの深い言語活動を日ごろから充実させておくことが必要である。このことにより、各領域で身に付けた能力を活用しながら伝統的な言語文化に主体的にかかわり、親しんでいくことができるのである。

本調査からは、伝統的な言語文化とかかわりの深い言語活動として、音読と書く活動の指導を改善する必要性が明らかになった。まず、音読については、昔話の言い回しや文語のリズムに親しむために欠かせないため、日ごろから多様な方法や形態を取り入れ（図24）、言葉の響きに気を付けながら読むことや、声に出して読むことを楽しむ経験を積み重ねておくことが大切である。このような意図的な指導により、音読が伝統的な言語文

| | |
|---|---|
| ○追い読み | ○一斉読み |
| ○ペア読み | ○一文交代読み |
| ○分担読み | ○部分限定読み |
| ○登場人物の動作や表情をまねて | |
| ○場面の様子が伝わるように・・・ | |

図24　多様な方法や形態の音読の例

化の学習において有効な活動となり得る(図25)。

本調査では、教師と児童の双方に調査を実施した学級において、クロス集計を行っている。その結果、日常的に音読を取り入れている学級は音読が好きな児童（２年)、多様な方法や形態で音読させているクラスでは物語や詩を読むと様子や気持ちが浮かんでくる児童（３年)、日常的に音読を行っている学級では好きな文や詩を繰り返して読んでみたいと思う児童（５年）が多く見られた。これらのことは、音読への取り組ませ方により、児童の意識に違いが見られることを示すものである。特に、高学年では、「音読が好き」と回答した児童は47％であるのに対し、「いろいろな方法で音読してみたい」と回答した児童は75％であることから、単調な音読に終始することのないように留意が必要である。

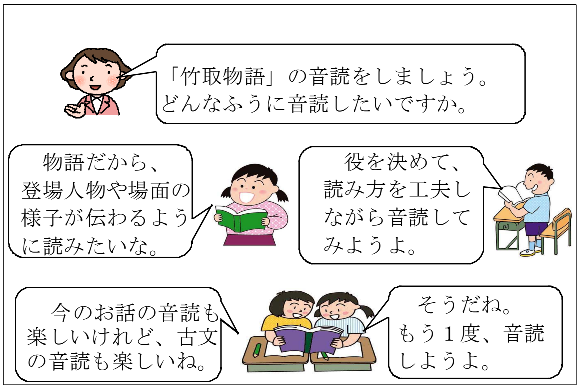

図25　各領域の言語活動で身に付けた能力が伝統的な言語文化の学習で活用される例（音読）

文を書くことについては、各学年で肯定的な意識をもっている児童が少ない。各領域の指導を通して伝統的な言語文化に親しませていくためには、音読や劇化、暗唱といった音声による表現だけでなく、書くことによる表現も大切な活動である。したがって、書く活動が親しむ態度を育成するために有効に働くものとなるように指導をしていかねばならない。しかし、教師の調査結果を見ると、「文の書き方について指導すること」については、重要度に比べて実現度が非常に低くなっており、きめ細かな指導を行う必要性がうかがえる。この点を改善することで、書く活動に対する児童の意識も好転していくと考える。また、俳句づくりなど児童にとってあまり経験がない活動に抵抗なく取り組ませるためには、思ったことやイメージしたことを短い文で書き表すなど、関連する活動を取り入れておくとよい（図26)。

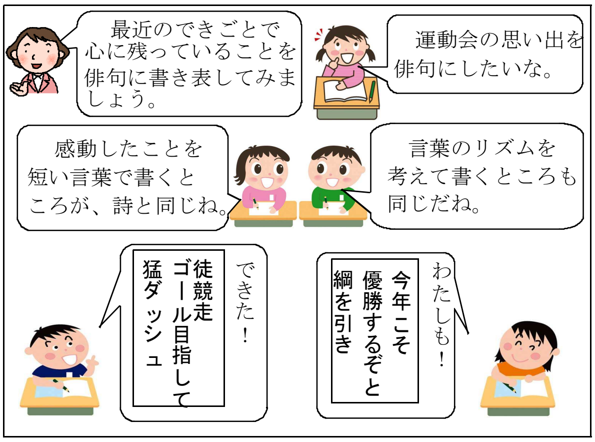

図26　各領域の言語活動で身に付けた能力が伝統的な言語文化の学習で活用される例（書くこと）

読書については、各学年で「好き」と回答した児童が８割以上と、高い数値を示している。また、読書に対する意識と、伝統的な言語文化の教材に対する興味・関心については関連があることが明らかになった。これらのことから、関連図書を紹介したり、同一作品を読み比べたりするなど、読書と伝統的な言語文化の学習との関連を図ることも、親しむ態度を育成するために取り入れたい手だてである（図27)。

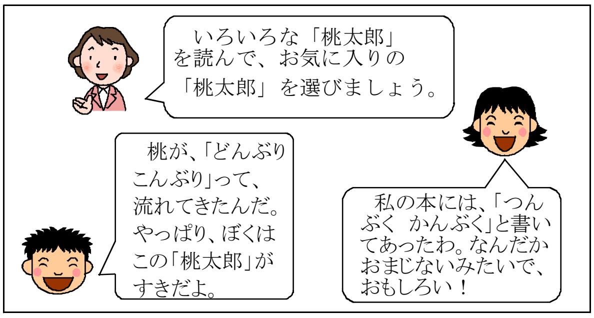

図27　同一作品の読み比べの例

## ３　伝統的な言語文化の指導にかかわる教師の考え

伝統的な言語文化にかかわる指導の成果として教師が期待していることについては、「昔話の言い回しや古文のリズムに慣れる」「小学校で学んだ経験が中学校での古典の学習に生かされる」に対しては「思う」の割合が多いが、「文語で書かれた文章の意味を読み取る」「創作に対して関心をもつようになる」「伝統的な言語文化に関連する本を進んで読むようになる」に対しては、少なくなっている。親しむ態度を育成するためには、各領域の言語活動を取り入れながら、多様な方法で教材とのかかわりを深めていくことができるような指導を行っていくことが大切である。

指導に当たっての疑問、不安については、「児童の経験や知識」に関してのみが、非常に低い数値となっている。しかし、本調査では、児童の経験や知識が学習に対する意識と関連することが明らかになっているため、親しむ態度を育成するためには、児童の実態把握が不可欠であると言える。したがって、教師が児童の経験や知識にあまり着目していないことを示す調査結果は、親しむ態度の育成に向けて危惧される部分である。一方、「小学生にどのレベルまで指導するのか」「どのような作品を選んで指導するか」「児童の興味や関心を高める方法」などに関しては、どの項目も80%を超えている。これらの疑問や不安を解消していくためには、研修会や公開授業に参加したり文献を読んだりすることなどを通して、指導方法や内容に対する理解を深めていく必要がある。また、教師自身が児童と共に楽しみながら授業を行うことで、伝統的な言語文化に対する児童の親しみも増していくと考える。

各自が把握している指導に関する情報については、学級や学年の垣根を越えて共有していくことが望まれる。児童の実態について情報を交換すること、共同で教材研究を行うこと、年間指導計画を見直すことなどを通して、学校全体で指導のばらつきが生じないように共通理解を図り、６年間を見通した系統的な指導を行っていくことが重要である（図28）。

図28　指導にかかわる情報の共有化

さらに、中学校との連携も推進していけるとよい。児童生徒の実態に関する情報交換や、授業を公開し合うことなどを通して、発達段階に応じた親しませ方への共通認識をもつことは、伝統的な言語文化に継続的に親しむ態度の育成につながるものである。

## Ⅷ　調査研究のまとめ

### １　成果

本調査を通して、次の事項を明らかにすることができた。

○　伝統的な言語文化にかかわる児童の経験や知識は、学習に対する興味・関心と関連している。
○　教師が重視する学習活動と、児童が取り組みたい学習活動には、多くの差が見られる。
○　伝統的な言語文化とかかわりが深い言語活動では、音読と書く活動について、指導の工夫・改善が必要である。
○　新たな指導事項であるため、多くの教師が指導方法や内容に対する疑問や不安をもっている。

上記の結果から、伝統的な言語文化に親しむ態度の育成に向けて、次の三点を提言する。

**提言**
○　児童と作品との出会わせ方を工夫し、興味・関心を踏まえた学習活動を設定しましょう。
○　伝統的な言語文化とかかわりの深い言語活動等を、日ごろから充実させましょう。
○　指導にかかわる情報の収集と共有化に努めましょう。

### ２　課題

伝統的な言語文化を扱った授業について状況調査を行い、親しむ態度の育成に向けての改善策を具体化していくことが今後の課題であると考える。

＜参考文献＞
・大熊　徹、藤田　慶三　編著　『「伝統的な言語文化」の授業ガイド』　東洋館出版社（2009）
・向後　千春、冨永　敦子　著　『統計学がわかる』　技術評論社（2007）